

第3章

昭和前期～戦争そして新たな一歩～

■忍び寄る暗い影

関東大震災後の1927年、日本で起きた金融恐慌は震災手形と呼ばれていた不良債権の処理を巡る騒動が原因でした。そして1929年10月21日、ニューヨークの株価暴落が引き金となり今度は世界的な規模で恐慌が起こります。

景気が悪化した日本では人々の不満が鬱積し、次第に軍部が力を握るようになります。1931年に満州事変が勃発し、1936年には陸軍の青年将校たちが後に二・二六事件と名づけられるクーデターを企てました。ファシズムが徐々に広がってゆき、第二次世界大戦の火蓋が切られます。

■不況打破！ 婦人雑誌の付録合戦

出版界は関東大震災後の不況打破のため、1926年頃から大衆に向けて1冊1円という廉価版で全集を刊行します。その作戦は見事にあたり、改造社の『現代日本文学全集』を始めとした「円本」は大流行。婦人雑誌は販売促進のために付録をつける作戦に出ます。各社とも豪華な付録を登場させ、中でも『主婦之友』・『婦人倶楽部』との間には合戦とも言えるべき競争が行われました。

『婦人倶楽部』 VS 『主婦之友』

この2誌の競争がエスカレートしたのは、1931年頃からです。当時『婦人世界』や『婦女界』といったライバル誌は既に没落していたので、覇を争うのはこの2誌になっていました。

単行本形式の別冊付録を初めて採用したのは『婦人倶楽部』です。対して『主婦之友』は、昭和9年の新年号でなんと15大付録をつけ、「お買いになる方は、風呂敷をお持ちください」という文句を流行させました。着物の型紙、家計簿など実用性で人気を博した付録合戦は、太平洋戦争勃発後の1942年新年号まで続けられました。

教養派ジャーナリズムの代表格『婦人公論』であっても、戦時色が濃い内容になっています。

『婦人公論』29巻3号[1944年3月]

「目次」より

決勝の航空機と船舶

「死者の書」と歴史

歴戦の軍旗・み旗のもとに

私たちの生活攻勢

皇國女性への信頼

子に従ふ

座談會 應徴士の妻がきく・働く娘の幸ひ

率先疎開した主婦の手記

摘まう野の草（日本の食生活への回帰）

■戦局の拡大と圧力

国全体が戦争へと突き進む中で、出版業界の取り締まりも厳しくなっていきます。多くの婦人雑誌は生き残りをかけて政府の要求を呑むしかありませんでした。

1941年の太平洋戦争勃発までは時局と歩調を合わせながらもなんとか誌面の独立を保とうとしていましたが、1942年あたりから誌面は戦時一色に染まっていきます。婦人雑誌も女性を動員・鼓舞する役割を果たす記事を多く掲載します。

戦時中の婦人雑誌

1937年7月7日の盧溝橋事件をきっかけに、日本は中国との全面戦争に突入します。その翌年1938年5月、内務省警保局は「婦人雑誌ニ対スル取締方針」を定め取り締まりを強化し、さらに1939年商工省命令によって雑誌用紙を従来の25%に減らしました。

1941年に入ると用紙統制の強化と共に雑誌の統合整理が行われ、婦人雑誌も整理をまねがれなくなります。残った雑誌も自由な編集は許されず、用紙の使用もかなり制限されるようになりました。

戦中に刊行された雑誌の表紙です。勤勉に働きつつ、かつ周りに安心感を与える温かい笑顔。求められる理想の女性像が当時の状況を反映しています。



『日本女性』（大陸講談社）
創刊号[1941年5月] 表紙

戦中も発行を続けた主な雑誌と掲載記事等

- 『主婦之友』1945年7月 勝利の特攻生活號
- 『婦人倶楽部』1945年7月 戦時緊急版
女子勤労総動員座談會
「生産陣に神風を捲き起せ」
- 『新女苑』1945年6月
大本營報道副部長陸軍少将栗原悦藏
「日本の新戦法」
- 『婦人畫報』1945年7月号「勝利の科学」
※1944年5月青年雑誌部門に移籍
誌名を『戦時女性』に変更
- 『婦人之友』1945年6/7月 一億農兵隊
※1944年4月生活雑誌部門に移籍

休刊に追い込まれた『婦人公論』

「不要不急誌」とされた『婦人公論』は1944年3月号で戦争協力の姿勢を打ち出しましたが、それでもその号を最後に『中央公論』に吸収される形で、実質上休刊となります。残った『中央公論』も、4ヵ月後の7月には、中央公論社が改造社とともに内閣情報局から戦争への非協力的態度を非難され自主廃業に追い込まれたため、廃刊を余儀なくされました。

『婦人之友』の変化

羽仁吉一・もと子夫妻が明治の終わりに創刊した『婦人之友』は、戦時下においては婦人雑誌部門では生き残れず、生活雑誌部門に移籍してなんとか存続します。商業主義に徹した生活実用誌だけでなく、生活合理化を通じて女性の地位向上を目指すという理想のもとに出発した『婦人之友』もまた戦争協力の姿勢を強めていったのです。

羽仁もと子 論説の変遷

創業者である羽仁もと子は『婦人之友』の巻頭に毎号論説を寄せていました。その内容も戦況が悪化するにつれ戦争協力へと傾いていきました。彼女がキリスト教信者であり自由主義者であったことを考えると、当時どれほど戦時色が濃くなっていたのかみることができます。

「生活短歌集」特選

(38巻1号[1944年1月]掲載)

女子勤労体制成る 阿部登喜(小樽)

をとめ子が職場に出て働くに
今は障らふ何ものもなし
南方に戦ふ兄に送らむと
秋深き野の落ち葉拾ふ

評 若山 喜志子

大東亜線も正に満二年を経過し、決戦段階に入ると共に戦は益々熾烈の度を加へてゐますが、その一方では新生亜細亜の建設が着々と進められてゐる。といふ輝かしい希望に充ちた信念を迎へるこの昭和十九年であります。



表紙に「生活雑誌」の印が押されている他、戦闘機が描かれています。

『婦人之友』(婦人之友社)

38巻12号 [1944年12月] 表紙

「撃ちてしまむ」

家庭は兵学だ 職域は戦場だ

(38巻3号 [1944年3月] 掲載)

敵が神州本土に近づいて来ました。事重大になればなるほど、国民一人々々が大切なものになってゆきます。私どもはお国のためにこの大切な自分を粗末にしてはなりません。～略～どこまでも励まし合つて、誰もが真に日本人らしく戦ひませう。このやうにして生命も財産も捧げ尽すならば、君の馬前にみ楯となつて討死をしたのです。それが我々の本望です。日本人としてそれ以上の死に方はありません。

■戦後、占領下での創刊ラッシュ

戦後日本を占領したGHQは、日本の民主化を推し進めるために雑誌メディアを使って世論形成を行おうとしました。発行部数の多い婦人雑誌も例外ではなく、戦後GHQの勧告で会社再建に乗り出した中央公論社と改造社は、『婦人公論』と『女性改造』を復刊します。戦時下に特権的地位にあった出版社として、主婦之友社、講談社を含む7社が戦争責任を問われましたが、『主婦之友』(1953年に『主婦の友』に変更)・『婦人倶楽部』は戦後も続刊します。その裏にはGHQから世論指導の協力を求める意向があったようです。現に『主婦之友』1945年11月号には「平和建設と家庭—アメリカ従軍婦人記者の座談会」といった記事などが登場しています。



用紙事情はすぐに改善しませんでした。民主化の勢いに乗り『婦人春秋』・『女性』といった新興誌や『暮しの手帖』のようにこれまでとは全く異なるコンセプトを持つ雑誌が創刊されました。

そして終戦後、高度経済成長を遂げた日本では女性の生活スタイルが多様化し、『週刊女性』(1957年3月創刊)といった女性週刊誌が誕生する一方で、『主婦の友』・『婦人倶楽部』といった主婦向けの雑誌は徐々に姿を消していきました。

『婦人倶楽部』の最終号です。
『婦人倶楽部』69巻4号
[1988年4月] 表紙

『暮しの手帖』

新しいタイプの婦人雑誌の登場

広告のない雑誌、そして広告がない故に徹底的に行える商品テストという、従来の教養派路線や実用派路線とは異なる『美しい暮しの手帖』が創刊されたのは1948年9月のことです。後に『暮しの手帖』に名前を変え、一時期は90万部を超える発行部数を誇りました。

市民一人ひとりへの問いかけからの「戦争中の暮らしと記録」によって反戦を取り上げるなど、戦争体験者としての強い思いが伝わってきます。



『美しい暮しの手帖』
(暮らしの手帖社) 1号
[1948年9月] 表紙

花森安治の宣言

これは あなたの手帖です
いろいろのことが ここには書きつけてある
この中の どれか せめて一つ二つは
すぐ今日 あなたの暮らしに役立ち
せめて どれかもう一つ二つは
すぐには役に立たないように見えても
やがて こころの底ふかく沈んで
いつしか あなたの暮らし方を変えてしまう
そんなふうな
これは あなたの暮らしの手帖です